

イベント実施からみたホスピタルデザインの実践報告

合田喜賢*¹ 森絵美*¹ 平野聖*¹ 尾崎公彦*² 真鍋克己*¹

要 約

本稿は、ホスピタルデザインの学問領域の構築の一環として、病院でのイベントを実施し、病院への貢献度、実践教育の有用性とその課題を報告するものである。「鑑賞型＋参加型」のイベントの実施は、参加者から高い評価を得ており、利用者満足度の点では病院へ貢献できたといえるが、集客、広報の方法について課題を残した。実践教育の面では、グループワークを通じて、自分の役割を認識するという点で成果があったが、チーム作業の偏りに課題が見出された。

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

地域の中核病院において、地域連携、利用者の満足度向上や健康増進等を目的とした健康介護に関する講座をはじめとするイベントを開催する例が近年多くみられる。

筆者らは、実際の医療福祉施設において、学生とともに実践的にデザイン提案を行うことにより、問題解決の実現を目指すという特色的な研究・教育活動を行っている。その活動の一環として、児島中央病院地域医療連携室から、患者サービス、院内改善のためのデザイン導入の依頼を受け、院内におけるイベントを実施してきた^{1,5)}。また、これにより、ホスピタルデザイン^{†1)}の学問領域の構築を目指している。

本稿では、これまでの3年間の活動概要をまとめ、イベントに注目したホスピタルデザインの医療機関への貢献、実践教育としての有用性と今後の課題という視点から検証、確認を行うことを目的とする。

1.2 研究の対象と方法

川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療福祉デザイン学科ホスピタルデザインコースでは、授業「医療福祉デザイン演習Ⅱ」において、児島中央病院公開医療介護講座でイベントを実施している。本稿では、2015年度から2017年度までの計3回実施したものを報告し検討の対象とする^{†2)}。

研究方法としては、まず授業における筆者らの記

録やスケジュール表、病院へ提出した企画書や実際の制作物、写真記録を資料として参照し、概要をまとめ、活動内容の振り返りを行う。そして、参加者アンケートにより、イベントが参加者の満足度といったかたちで病院へ貢献できたかを確認する。また、学生に対しては、経済産業省「社会人基礎力」⁷⁾を活用し、実践教育としての有用性と課題を述べる。

2. 病院におけるイベントの概要とアンケート結果による検証

2.1 イベントの概要

児島中央病院では、利用者満足度の向上や健康増進を目的とした公開医療介護講座を月に1度開催している。筆者らは、授業「医療福祉デザイン演習Ⅱ」の一環として、上記の講座において、イベントの企画・運営と、ポスター、チラシ、ノベルティー等の制作を行った。期間は、春学期の授業がはじまる4月から開始し、イベント本番は8月の実施となる。

各年度のイベントの実施日、内容、参加者数（利用者・学生）を表1にまとめた。また、各年度ごとの制作物については図1に、準備および当日の様子写真については図2にまとめた。

以下、内容について簡単に触れ、反省点を踏まえ、より新しく導入した点や改善した点を述べて、イベントの構造を整理し、利用者アンケートの結果を示す。そのうえで若干の考察を行い小括とする。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 こども医療福祉学科

(連絡先) 合田喜賢 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : goda.y@mw.kawasaki-m.ac.jp

表1 各年度ごとのイベントの概要

	(1) 「おしえて! ももたろう」	(2) 「どうなる!? うらしま太郎」	(3) 「赤ずきんちゃん」
実施日	2015年8月12日(水)	2016年8月10日(水)	2017年8月10日(水)
内容 (イベントの構造)	・「桃太郎」をもとにした紙芝居 ・健康に関するクイズ(スライド使用) (鑑賞型+参加型)	・「浦島太郎」をもとにした紙芝居(スライド使用) ・健康に関するクイズ(スライド使用) ・座ったままでできる体操(鑑賞型+参加型+参加型)	・「赤ずきん」をもとにしたパネルシアター ・健康に関するクイズ(スライド使用) (鑑賞型+参加型)
参加者数	13名	12名	14名
参加学生数	6名	4名	8名

	(1) 「おしえて! ももたろう」	(2) 「どうなる!? うらしま太郎」	(3) 「赤ずきんちゃん」
【制作物1】 チラシ			
【制作物2】 ノベルティ	なし	 表 裏	 表 裏

図1 各年度ごとの制作物

	(1) 「おしえて! ももたろう」	(2) 「どうなる!? うらしま太郎」	(3) 「赤ずきんちゃん」
準備の様子			
当日の様子			

図2 各年度ごとの準備・当日の様子

2.2 2015年度春学期 紙芝居「おしえて！ ももたろう」

2015年度は、森ら^{1,2)}が詳しくまとめている。これによれば、当初は参加型イベントと鑑賞型イベントの2案を病院へ提出した。病院側からは、移動を伴う参加型イベントは高齢で体の不自由な方が多く対応が困難であり、参加人数が少数にとどまった場合に実施しにくい、という意見が挙がった。このような問題点があったため再検討、そして病院側との協議のうえで、鑑賞型の紙芝居に、大きな移動を伴わない参加型の健康に関するクイズを盛り込むという内容に決定した。ここに「鑑賞型+参加型」のイベントを行うというひな形ができた。

紙芝居は、岡山県民になじみ深い「桃太郎」をベースにしたストーリーとし、手書きでキャラクターデザインをしたものをコンピュータを用いてデジタルデータに加工した。紙芝居の枠は手作りとした。クイズは、院内の管理栄養士の監修を受けるなど正確性を担保し、利用者にとって役立つ内容とした。開催にあたってはPR用のチラシを制作し、病院側に印刷・配布等を依頼した。

当日の参加者は13名であった。利用者アンケートの結果は、「講座の内容」は、「とてもわかりやすい」が100%、「参考になったか」になったかという問いには、「とても参考になった」が90%、「少し参考になった」が10%であった(図3)。

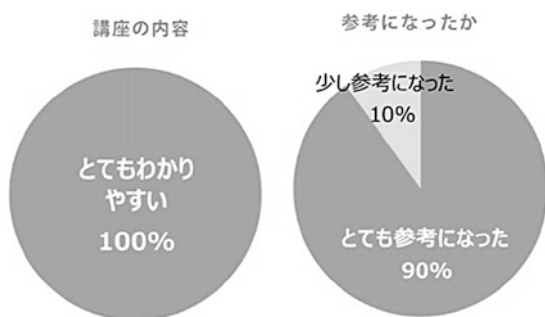


図3 2015年度参加者アンケート結果

2.3 2016年度春学期 紙芝居「どうなる!? うらしま太郎」

2016年度は、前年度同様紙芝居を行った。紙芝居は、参加者には高齢者が多いため昔話がなじみ深いと思われた点、児島中央病院が海のそばである点を勘案し、「浦島太郎」をもとにしたストーリーとした。また、健康に関するクイズを盛り込んだ。前年度同様、「鑑賞型+参加型」のイベントとしたが、これに加えて、座ったままでできる健康体操を提案したところ、病院側に受け入れられた。イベントの構造は、「鑑賞型+参加型(クイズ)+参加型(体操)」となる。

今回より新しく導入した点、改善した点は、上述の体操と、ノベルティーの制作、参加者との交流の3点である。ノベルティーは、夏季の開催ということもあり、うちわを制作した。前年度は、紙芝居を行ったのみにとどまり、参加者との交流がなかったという反省があったので、今回は、紙芝居終了後にノベルティーを配布し、それと同時に参加者とコミュニケーションをとることを重要視した。

当日の参加者数は、12名であった。アンケート結果は次の通りである(図4)^{†3)}。「患者のためになるか」という問いに7人中6人が「とても思う」、「やや思う」と回答したのが7人中1人、「イベントを気に入ってもらえたか」、「また参加したいか」という問いは2問とも、10人中6人が「とても思う」、10人中2人が「やや思う」とそれぞれ回答した(図2)。

2.4 2017年度春学期 パネルシアター「赤ずきんちゃん」

2017年度は、学生にとってマンネリとなるのを防ぐため、紙芝居以外の新たな提案を目指すことを重視した。その結果、過去2年同様の紙芝居に加え、パネルシアターが事前の提案として学生から出された。病院へ両案を持参したところ、パネルシアターが選ばれることになった。これに健康に関するクイズを盛り込んだ内容とした。パネルシアターの内容



図4 2016年度参加者アンケート結果

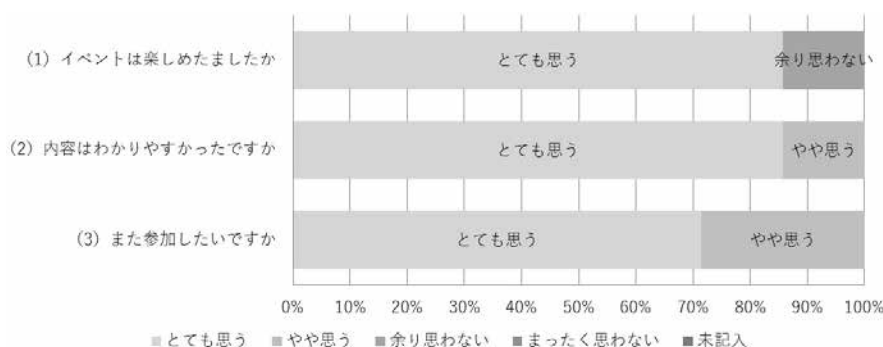


図5 2017年度参加者アンケート結果

は、「赤ずきん」をもとにしたストーリーとなった。クイズは○×形式のクイズとした。2015年度と同様、イベントの構造は、「鑑賞型+参加型」となる。

今回より新しく導入した点、改善した点は、パネルシアターを採用したこと、ノベルティーのうちわをクイズの際に使用できるように○×を表裏に印刷したことが挙げられる。特に前者は、初めての試みであり、前もってセリフ、BGMは録音しておき、当日はパネルの演技に集中するなど学生は試行錯誤を重ねた。

当日の参加者数は、14名であった。アンケート結果は次の通りである(図5)。「内容はわかりやすかったか」という問いには、7人中6人が「とても思う」、1人が「やや思う」と回答した。「イベントは楽しめたか」という問いには、7人中6人が「とても思う」、1人が「あまり思わない」と回答した。また参加したいかという問いには、7人中5人が「とても思う」、2人が「やや思う」と回答した。

2.5 小括

イベントは、「鑑賞型+参加型」の形式を踏襲しつつ、前年の反省を踏まえ、新たな取り組みを導入しつつ進めたといえる。2016年度の体操や2017年度にパネルシアターが採用された点はそのことを示す。運営側のモチベーションを維持することになってきたように思われる。その一方で、「参加型」のイベントは3年連続でクイズを行っており、マンネリ化は否めないが、参加者にとっては初めての体験となるためか、後述のアンケート結果で高評価を得ている。

参加者のアンケート結果によれば、「内容のわかりやすさ」、「イベントを楽しめたか」、「また参加したいか」で8割以上の参加者から高評価を得た。回答数は少ないが、3年連続で良い評価を得ている。当初は不安のあった「参加型」イベントも満足度が高かった。このように、利用者満足度という点で病院への貢献度は高かったといえる。

一方で、参加者数は3年連続10数名で推移し、伸び悩んだ結果となった。イベント終了後に行った病院スタッフからも、イベント自体は高い評価を得たものの、病院側の問題点として集客数の増加を挙げられた。チラシの制作は毎回行い、周辺の施設にも配布したが、集客の効果はあまりなかったようで、病院側、大学側の双方に広報面での課題があることが浮き彫りとなったといえる。

3. 学生への教育効果の有用性と課題

3.1 学生への質問内容

イベントの企画前とイベントの実施終了後、学生に対してアンケートを行った。2016年度より、経済産業省「社会人基礎力」を試験的に導入している。

質問項目は、3つに大分類と、これを12の能力要素に細分したものである。3つの大分類は、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」である。これらの細分類として、「前に踏み出す力(アクション)」は「主体性」「働きかけ力」「実行力」の3項目、「考え抜く力(シンキング)」は「課題発見力」「計画力」「創造力」の3項目、「チームで働く力(チームワーク)」は「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の6項目、計12の能力要素で構成される。

筆者らは旧稿³⁾において、1) 計画性の評価のアップ、2) チームワークの効果という成果、3) 個人としての成長という課題、の3点を指摘した。本稿では、2年分のデータが取れたため、これまでの結果を自己の評価がアップしたもの、変わらないもの、ダウンしたものに分類する。そして、学生のコメントで重複したものを抽出して、学生の自己評価の傾向を探り、旧稿と比較して実践教育の有用性について検討したい(表2)。

3.2 評価がアップした項目

イベント実施後に評価がアップした項目は、大分

表2 社会人基礎力を用いた学生へのアンケート結果

		評価アップ	変わらず	評価ダウン	評価の根拠（実施後のコメント）（複数のものを抜粋）
前に踏み出す力 （アクション）	主体性	3	<u>6</u>	0	・少し他のメンバーに頼りぎみになっていた（2016） ・自分の役割を最後までやり抜くことができた（2016・2017） ・一人の負担が大きくなってしまったことがあった（2017）
	働きかけ力	<u>4</u>	3	2	
	実行力	1	<u>8</u>	0	
考え抜く力 （シンキング）	課題発見力	1	<u>7</u>	1	・ある程度計画性を持って作業できた（2016） ・後半時間がぎりぎりだった（2017） ・グループワークでしっかり話し合えた（2017）
	計画力	<u>5</u>	4	0	
	創造力	3	<u>4</u>	2	
チームで働く力 （チームワーク）	発信力	3	<u>6</u>	0	・人の意見を取り入れることができた（2016） ・担当ごとに作業をしながらも、協力しながらできた（2016） ・一人にまかせきりにならないようすべきだった（2017） ・連携が行き届いていないことがあった（2017）
	傾聴力	<u>4</u>	3	2	
	柔軟性	1	3	<u>5</u>	
	状況把握力	<u>4</u>	<u>4</u>	1	
	規律性	2	<u>6</u>	1	
	ストレス コントロール力	2	<u>6</u>	1	

凡例 ・「評価アップ」「変わらず」「評価ダウン」欄の数字は、12の各項目において回答した学生数を示す
 ・もっとも学生の回答が多かった評価項目には下線を施した

類では「チームで働く力（チームワーク）」、小分類では、「計画力」、「働きかけ力」、「傾聴力」、「状況把握力」であった。評価の根拠として、「自分の役割を最後までやり抜くことができた」という意見がみられる一方で、「他のメンバーに頼りぎみになっていた」、「一人の負担が大きくなってしまったことがあった」という。このあたりが「働きかけ力」がアップした理由と思われる。「計画力」がアップしている一方で、「後半ギリギリになった」というコメントがみられたが、これはパネルシアターという初めての試みであったために計画通りにいかなかったのが原因であるとみられる。「傾聴力」、「状況把握力」がアップしたのは、「他のメンバーに頼りぎみ」や「一人の負担が大きくなった」と表裏の関係で、チームの他のメンバーと作業内容の偏りがあったことを示すものとみられる。

3.3 評価がダウンした項目

一方、評価がダウンした項目は、「柔軟力」であった。しかし、「人の意見を取り入れることができた」というコメントもあり、矛盾しているようにも思われる。「一人にまかせきり」になり、「連携が行き届いていない」ようになったのは、コミュニケーションの不足といった点が原因ではないかと推測できよう。

3.4 実践教育の有用性と課題

以上のように、旧稿で指摘した3点、即ち、1) スケジュール作成による計画性の評価のアップ、2) チームワークの効果という成果、3) その一方で個人としての成長に課題、はある程度普遍的な有用性と課題であると考えられる。特にグループワークである場合、メンバー内の作業内容の偏りが大きな原因であると考えられる。これは、担当教員の目配りと対応が行き届かなかった点も問題であっただろう。教員の介入の仕方についても検討が必要である。

4. まとめ

「鑑賞型」と「参加型」を組み合わせたイベントへの評価は高いといえる。参加者数も、10数名を一定して集めることができた。このように、イベントの病院における重要性が認められるといえる。今後病院側へのヒアリングを行い、検証を深めたい。また、今後の課題は、より効果的な集客、広報の方法である。こちらも併せて検討する必要がある。

実践教育としては、計画性の評価やグループワークによる自分の役割を果たすという点で有用であるといえるが、作業の偏りがあるという点に課題を残した。

付 記

児島中央病院地域医療連携室・安田浩二、野田祥平、友定愛の各氏には格別のご配慮を賜りました。末筆ながらお礼申し上げます。

本稿は既に発表したもの^{3,4)}を、補訂し書き下ろしたものである。当日ご参加の方にお礼申し上げる。

また、本稿は「平成28年度医療福祉研究費「ホスピタルデザインの実践と検証」(研究代表者：真鍋克己)の成果の一部である。

注

- †1) ホスピタルデザイン研究会による「ホスピタルデザイン」の定義は次の通りである⁶⁾。
本研究会のめざすホスピタルデザインは、患者が安心かつ快適に療養に専念できるとともに、医療スタッフに関わる診断・治療行為に一層専心できるための、特色ある病院の実現をデザインによってサポートする行為を指します。
それは主に病院勤務者によって行われ、病院事務をはじめとして、診断・治療に係るすべての院内環境に注意を向けると共に、医療システム及び関連情報を、患者、医療スタッフ双方の視点から客観的に見つめることにより、より良い状況を実現します。
- †2) 本稿で取り上げた以外に、2016年度秋学期「医療福祉デザイン演習Ⅲ」において実施した「簡単！ モビール型ひな人形」がある。これは紙芝居ではなく、紙コップでひな人形をつくるというワークショップであり、他のイベントとは時期や性格を異にするため比較考察の対象からは外した。
- †3) アンケートは、前年度より詳しい結果を求め項目変更したため、グラフの種類が異なっている。

文 献

- 1) 森絵美, 合田喜賢, 平野聖, 尾崎公彦, 真鍋克己: 病院でのイベント企画実践を通じたホスピタルデザイン教育の有効性. 川崎医療福祉学会誌, 26(1), 85-89, 2016.
- 2) 森絵美, 安田浩二, 合田喜賢: ホスピタルデザイン教育における児島中央病院でのイベント企画の実践事例. ホスピタルデザイン研究会第3回研究大会, 岡山, 2016年2月13日.
- 3) 合田喜賢, 森絵美, 平野聖, 尾崎公彦, 真鍋克己, 松本正富: ホスピタルデザイン教育の実践報告—児島中央病院のイベント開催の事例を通して—. 川崎医療福祉学会誌, 27(1), 183-191, 2017.
- 4) 合田喜賢, 真鍋克己, 平野聖, 尾崎公彦, 森絵美: ホスピタルデザインの実践報告と今後の課題. 第21回医療福祉研究報告会, 岡山, 2017年11月9日.
- 5) 合田喜賢, 真鍋克己, 平野聖, 尾崎公彦, 森絵美: 大学の活動としての病院におけるイベント開催の実例. ホスピタルデザイン研究会第5回研究大会, 岡山, 2018年2月17日.
- 6) ホスピタルデザイン研究会HP: ホスピタルデザイン研究会の概要.
<http://www.kawasaki-m.ac.jp/mw/design/hd/index.html>, [2015]. (2017.11.6確認)
- 7) 経済産業省: 社会人基礎力.
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> [2007]. (2018.3.26確認).

(平成30年7月6日受理)

A Report on “Hospital Design” as Seen through Event Planning at a Hospital

Yoshikata GODA, Emi MORI, Kiyoshi HIRANO, Kimihiko OZAKI and Katsumi MANABE

(Accepted Jul. 6, 2018)

Key words : hospital, hospital design, event

Abstract

We conducted events at a hospital and considered the contribution to the hospital, the usefulness of practical education and its problems. As a result of doing the events, the events (“Appreciation type” + “Participation type”) gained high praise from the participants. We contributed to the hospital in terms of user satisfaction. The problem is how to attract customers and publicity. The achievement of practical education is that students were able to recognize their role through group work. The problem is that amount of work in the team was unbalanced.

Correspondence to : Yoshikata GODA

Department of Design for Medical and Health Care
Faculty of Health and Welfare Services Administration
Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : goda.y@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.1, 2018 305 – 311)

